



# 筑紫女学園大学リポジット

## Ba and Communication : Generating Interactive Dialogue

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, テーマ, NAKAMURA, Tamah メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/110">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/110</a>

# 場とコミュニケーション - 身体とことばの対話

中 村 テ ー マ

## Ba and Communication - Generating Interactive Dialogue

Tamah NAKAMURA

### Abstract

Seiryukai group situates movement activities and discussion activities in specific localities with spatial dimensions connecting the internal and external to each other. The Japanese concept of *Ba* captures this embracing sense of space, and I will use this concept of *Ba*, a generative matrix of interaction, to describe the various aspects of Seiryukai's activities in terms of connection through body movement and discussion. To understand this shifting network within which many Seiryukai participants find connection through time and space, the concept of various *Ba* are illustrated through descriptive passages about what happens in each of the *Ba*: physical *Ba*, somatic movement *Ba*, social *Ba*, and generative *Ba*. These spaces are where activities are carried out, what social activities occur there, how the somatic self and group moves, and what meaning is generated for the participants.

### 青龍会の〈場〉

青龍会そのものが共同で様々な活動をする場であり、感情を活性化させ関係づけるスペースになっている。空間的な広がりをもつ特別な所として展開されている。内部と外部ともいえる、空間のふたつの面は互いに関連しあっている。日本語における〈場〉という概念は、空間的な包みこむ感覚をうまく捉えており、この概念を青龍会の多様な面を描きだすのにここで使用する。相互作用・交流を生みだす母体としての〈場〉、という核になる概念を使って、青龍会そのものの意味もつかめるようになるだろう。おおぜいの青龍会参加者が時間と空間をとおして発見する、関係がシフトしていくネットワークを理解するために参加者が体験するそれぞれの場でなにが起こっているかを説明し、青龍会の〈場〉という概念を表してみる。それは物理的な〈場〉、ソマティックな〈場〉、社会的な〈場〉、それに生成する〈場〉である。

こういった互いを連結させる物理的な空間とは、活動が行われる所であり、社会的な活動が起こる場所である。そこでは個人の身体や集団がどのように動き、参加者にとってどのような意味が生まれているのだろうか。こういったコンテキストの全体が、青龍会に参加することの意味を理解させるだろう。すべての〈場〉が青龍会であることをくっきりと描きだすために、一般的なコメント

や説明を使いながら、特別な事例をあちこちに配置し使っていく。

## 認識創造のウェットである〈場〉

〈場〉という日本語の概念は、幅広いレンジの内包（暗示的意味）に帰する多様な外延（記号表示）である。それらは場、所、域、地面、枠組、機会、フォーラム、舞台、コンテキスト、それに相互作用などと翻訳されている。Nishida（西田幾多郎）は1927年の〈場〉に関する独創的な仕事のなかで、彼の〈場〉の論理という哲学を、他者や環境との関係のなかで主体に相対的な位置を与える、純粋な体験の哲学だと表現している（Abe & Hogg1990年、Carter1997年、Nishitani1991年）。西田は場所を「客観化の分析や表現以前の直感」と定義している（Carter1997年）。場所という語は、共に地や域を意味する「場」と「所」という語からなっている。

英訳されたNakaneの独創的な仕事では、〈場〉は、「境界を設定する基準をとおして諸個人をひとつのグループに束ねる地域や団体または特別なつながり」と定義されるフレーム（“枠”）となっている。Kuwayamaはある共同体（特に共同体のなかの個人）に対して“枠”を使う場合には意味のターミノロジーを拡大している。彼の村落に関する研究では、“枠”は「社会関係をつくりあげるための共通の基盤を集団に提供する地域」とされている。あるグループの結合力は、仕事をとおしてだけでなく主体的で感情的な参加をとおしての、“枠”におけるメンバーの一体化に依っている。“枠”とは、社会的関係をつくりあげるための共通の基盤のある集団に提供する地域（または共同性）である。それゆえその構成は人的活動をとおして明らかになる（Kuwayama1992年、Long1999年）。つまり自己認識は個々人のダイナミックな相互作用をとおして創られる。

〈場〉を単に場所や地域とする翻訳は、「動的な社会的要請と相互に作用しあう時空間にいる人間に、前進する原動力を提供する〈場〉」という、その主要な要素と相容れなくなる（Bachnik1994年）。

文献研究をまとめてみると、〈場〉は認識創造のウェットであり、それを可能にするコンテキストだと定義できる。（Nonaka & Takeuchi 1995年、Nonaka & Teece2001年、von Krogh, Ichijo & Nonaka 2000年）。〈場〉は、認識を創りだす基礎（相互交流のネットワークとも定義できる）を備えた共有のスペースと定義されている。それは物理的なスペースに限定されるのではなく、認識創造に関わってくる物理的な、ヴァーチャルな、心理的なスペースを包含し統一する。さらに von Kroghによれば、創造される認識はダイナミックで関係しあっており、また人間の行為に基づいているから、NonakaやTeeceが指摘するように、認識は〈場〉にはめ込まれていると言えるだろう。

認識は個人がひとりで行うことによってではなく、諸個人間の相互交流や個人とその環境との相互作用によって創りだされる。〈場〉とは、互いに作用しあう者たちによって、また交流自体をとおして共有され、〈場〉に参加するものによって共有されるコンテキストである。またコンテキスト自体が、認識を創造するための自己超越をとおして展開される。〈場〉の参加者はたんなる傍観者ではありえない。そうではなく彼らは行為や相互交流により〈場〉にコミットしているのだ。

<場>の創造は、グループの他のメンバーへの思いやりや信頼にかかっている。わたしは<場>を、核になるテーマのことばとして選んだ。<場>を、相互作用が生成される母体であり、そこから参加者にとっての新しい理解や認識の方法が生まれてくる所という意味に使っている。

## 青龍会の1日

ここでは青龍会参加者が、生活や仕事の間からワークショップにやってきた時はどうだったのか、またワークショップの過程をとおして、またその後の打ち上げでの討論でどうかわったかを考察してみる。

## 物理的な<場>

物理的な<場>という空間には、流動的で有機的なつながりをもつ周囲との相互作用・交流がある。人々が互いに結びつき関係をつくり始めるために集まり、様々な活動を行う所である。下記の青龍会行動活動の物理的な<場>の描写は、わたしが3年間参加した青龍会活動のフィールドノートからとられている。

青龍会が舞踏ワークショップやそのほかの活動を行う多様な場所や空間には、パピオセンター、アートスペース、海岸、芥屋パラダイスパーク、ストリートパフォーマンスのショッピングモール、アパート、食事のための買い物に近所を通してスーパーにみんなで行く散歩や、事務所から練習場への移動、または公演の会場などがある。わたしが何度も参加した青龍会の1日はこういう具合だった。

忙しい仕事を終えた後みんなは練習場に行く前に、地下鉄や自転車、バイクに乗り、または近所から歩いて、住居を兼ねた事務所へ先ず集まってくる。荷物やバッグを置いてコートを脱ぎ、持ってきた食べ物や飲み物を台所に運ぶ。しばらくの間座って休み、なにか飲んだりする。日常的な挨拶の他には、肩に負っている仕事の話などをするエネルギーはまだほとんどない。7時前にみんなですべてレコーダー、延長コード、CDをまとめ、アパートを出てゆっくりと練習場へと向かう。

## 近所の様子

ワークショップの間から事務所へと歩いて行く道のそばには、2層になった都市高速道路の灯りと高さを競うように11階建ての公営住宅がある。高速道の反対側、ふたつの川に挟まれて、博多のかつての商業の中心地だった低い建物の商業地域がある。その向こうは武士階級の歴史的遺産が残るアップタウンの福岡で、繁栄する現代的ビジネスエリアになっている。中規模の店舗ビル、ガソリンスタンド、ファミリーレストランなどを過ぎて大きな通りから向きをかえ、自転車や歩行者がやっと一列縦隊で通れるような幅の歩道に入っていく。路地にそって荒廃した木造の2階建ての家が、大小の錆びたタンで修理され雨漏りを防ぎながら建っている。梅雨時の湿って暑い夜、風が入り口から入ってくるように、玄関はつかい棒で半分開けてある。通りすがりにちょっと見えるのは年老いた夫婦が台所に座り、重く湿った空気のなかでどこかの祭で無料でもらったような団扇を使っている。

路地から出て小さな駐車場を抜け裏口からアパート群のなかのオレンジと茶色のタイルのロビーに入っていく。ふたつのエレベーターのドアは、自転車を各自の部屋に運んでいくためにできた傷が内にも外にもついている。1階のボタンは頻繁に押されているのでかすれて見えない。装飾のない、使い古した外観にも関わらず、ロビーにもエレベーター内にもほとんどゴミがない。ここはたんなる公営住宅にすぎないが、荒れた中に清潔感からくる日本的な味わいも感じられる。9階の吹きさらしの廊下を抜けて事務所兼住居へ向かうとき、周りを囲むアパート群の間からみえる高速道からの騒音が伝わってくる。この新旧の混淆は、かつての貧困地区を近代化するという10年前の都市計画の結果である。この公営住宅群は、非営利のボランティアグループにとって手頃なものにもなっている。

## 事務所兼住居

建物のいちばん端にある部屋に近づくと通路のすみに積み上げられた舞台装置に迎えられる。池として使われたプラスチックの容器に溢れる装飾的な木片、容器の縁にはその時の水にみだたジェリー状の緑の破片が残っている。他にも頭のないマネキン、いろんな長さの木の枝、1本は白く塗られている、手甲の衣装だったねじった針金の束。

砂岩色の大きな石が入り口のドアの下に置かれ閉まらないよう支えている。部屋に入る前にみんなが靴を脱ぐので、玄関はぎゅうぎゅうに押し込まれた履き物ですぐにいっぱいになる。つま先立ちにそこを抜けて、入ってきた玄関と平行にある台所付きの部屋に入る。そこは家具がまばらで、中央に小さな四角い低いテーブルが置かれ、キッチンの間には椅子がふたつ着いた小さなダイニングテーブルが押し込まれている。ハマダさんが食事の準備をしているときは、料理の音とオペラ的な歌がキッチンから聞こえてくる。彼はアマチュアのコーラス員だ。2本の長い蛍光灯が天井に取りつけられ部屋を照らしている。パフォーマンスに使われた長い紐が灯りの一本からぶら下がっている。チラシ、ファックス、チケットが壁にピンで留めてある。このリビング/ダイニングルームが青龍会の事務所として使われていて、ファックス機、舞踏のビデオや本で溢れた本棚、舞踏公演のチラシや書類、グループに関係する新聞や雑誌の記事のファイルボックスなどが置いてある。原田さんの白いウェディングドレスが壁に掛けられている。一方の長い壁には押し入れの襖があり、みんなが寝るときに引き出す布団やマットが入っている。

## パピオ練習場

青龍会のワークショップは毎月、第1と第3金曜日にパピオと呼ばれている福岡市音楽演劇練習場で行われる。4階建ての下2階部分は音楽練習用の防音ルームであり、3階はスケートリンク、最上階はボーリング場になっている。我々は地下2階にあるB2と呼ばれる20人ほどの参加者に適した部屋に集まる。今までに借りた最大のものは地元の踊りのために借りた部屋で、いちばん小さいのは参加者なら10人くらいにちょうどよい大きさの部屋。部屋は小さなジムのようになっていて、2面の防音壁にカーテンが掛かっている。カバーを掛けられたピアノが隅に置いてある。頭上の円形蛍光灯が強く白い光を注いでいる。裸足の足に、磨かれたジムの床はなめらかで冷たく心地よい。参加者の組みあわせは個人からグループまで多様で、人々は休んだり他の人を見たりしながら座っている。このウォーミングアップの時は明るい頭上の蛍光灯をつけて行われ、歩く練習と自由な動きの時は、すみの小さな舞台照明だけで行われる。この照明は闇を貫く円錐形の強い光を放ち、暗い部屋とくっきりしたコントラストをつくりながら、人々の影を反対側のカーテンの壁に映し出す。

物理的な〈場〉が、多様な相互交流を起こす空間をつくりだしていることがわかってくる。そう

いった空間で起こる相互作用が〈場〉を創りだす。相互交流は、参加者が事務所に集まり互いに挨拶し、いっしょに歩きながらおしゃべりしているときにも、相互に関わりあいながら展開されている。参加者は練習場に到着するまでに、いっしょに行動し体験を共有しようという目的によって、互いにつながり合われている。続くソマティックな〈場〉では互いの関係は持続し、ソマティックな会話が生みだされる。

## ソマティックな〈場〉

参加者をさらに関係させあいつなげていくソマティックな活動として、ワークショップは青龍会にとって非常に重要なものである。

### 青龍会のワークショップ

夜の7時頃にみんなは練習場に集まる。ウォーミングアップの後一団は あたかも氷やガラスの上を一センチずつすり足で行くように磨かれた床からほとんど足を上げないで滑らしながら、ゆっくりと動き始める。目は開いて焦点を結ばないでいる。ワークショップが自由な動きに進むと、次の一時間半は参加者はひとりで、または小さなグループ、時には大きなグループと相互に出入りしつつ、それぞれのイメージやテーマにそって動く。

ワークショップからその後の打ち上げまで切れ目なくつながりながら展開していくので、青龍会の舞踏ワークショップのなかから、展開のそれぞれの段階での典型的なシーンを取り出すのは難しい。その過程は一貫したものとしてゆっくりと現れてくる。ワークショップは技術的な指導ではなく、参加者や観客がその体験をとおして変わっていく「変性の探求」(Fraleigh & Nakamura 2006年)である。この意味で舞踏はターナーの人類学的な仕事(1982年)のような演劇やパフォーマンスの研究ではない。ソマの研究は、他者からどう見られるかではなく、いかに自分のソマのあり方が変化していくかを知覚することを主体体験の焦点に当てている。他の参加者や観客にも見られることで、この体験は個人を超えた体験として共有される。

青龍会のワークショップには、どう動くか、なにを感じるか、なにを考えるか、どう演じうるかといったはっきりした指導方法はない。参加者は自分なりのやり方で解釈する。そうすることで参加者は、こうやらなければならないといった脅迫観念から逃れられるし、さらにはそういうことを期待しないようにまわりに要求することができるようになる。各参加者はそれぞれ異なった意味や体験を持つことになる。

以下はワークショップの一部分の素描であり、青龍会参加者が他のメンバーや社会と関わりあっていくようすである。一連の〈探し求める行為〉は、個人が自分自身や他の参加者と相互交流できる機会を与える。練習場に入ることをとって、人々がその背景の社会的なルールのある世界を離れ、先ず自分の物理的な身体と改めてつながろうとすることであり、そこは体系化されてない、〈探し求める行為〉の場である。以下は3年間のわたしの観察から採った典型的なワークショップのやり方である。

6：30頃から青龍会が借りた練習場に集まりはじめる。鞆やハンドバッグ、大きな重そうなブックバッグを抱えてひとりずつばらばらに仕事場や学校からやってくる。緊張と疲れが表情に残り、知りあいになんかちょっとした挨拶をする以外には笑いもおしゃべりもない。スエットパンツやTシャツをバッグからだし、外の廊下の洗面所か、練習場内の天井から床まで下がる重いカーテンの裏で着がえる。日常の仕事着である紺のスーツとネクタイ、ズボンとジャケット、スカートとブラウス、ジーンズから動きやすいゆったりとした快適な衣服へ着がえる時、カーテンの裏のあちこちで動いている体の形の膨らみがみられる。着がえた後、広い床でしばらく首や肩、足などを解きほぐすようにゆっくりとストレッチし、他の何人かは上向きに横になり、腕をいっぱい伸ばし、目を閉じ呼吸を整えリラックスしている。踊りのためのダンサー用の特別な筋肉ウォーミングアップを目的としたストレッチを行ったりはしない。穏やかに静かに自分自身の物理的な体との新しい関係を探し求める。

## 何かを探り始める波になる

何かを探り始める波になることは、自分自身を見ること（もうひとつの自我をみること）と、見ている自我と相互交流している自分自身を体験すること、その両方を観察することに焦点を当てている。

毎日わたしたちは特別な自覚なしに息を吸い、吐きだしている。この過程を意識的にコントロールしてみる。まず息を深く吸い、完全にお腹が空になるまでゆっくり吐き出す。吐き出すとき、尾骨を床に向けてかかとに座るように静かにうずくまる。尾骨が地面に深く根を張るのを想像する。頭から足まで中心を棒が貫いているのを想像する。うずくまった姿勢から、棒があなたを地面に結びつけ下へ押しつけているのを感じながら、すこくゆっくり立ち上がりはじめる。完全に立ち上がった姿勢で頭の先からでている透明な紐があなたを空へと引っ張り上げるのを想像する。引っ張られている感覚を保ちつつゆっくり踵へとうずくまってくる。これらのイメージと共にできるだけゆっくり上がったり下がったりを繰り返す。完全に立った姿勢で後ろから誰かに引っ張られるのを想像する。抵抗して前に進む。引っばる力に抵抗しつつ反対の方に、どの方角でもいいから向かう。引っ張る力を感じ続けながら、腕を上げ、足を上げ、まわり、走り、ジャンプし、倒れる。どんなに行動が激しくてもそれを静かに観察する。自分自身をみる。それからもうひとつの自我をみる。その観察のなかに精神的なバランスの中心が存在する。この精神的中心から、外に向かって放射される無数のさざ波のような光の筋と、喜びに溢れて交流しあう。あなたは内に外にうねる波になる。あなたは今、光であり闇である。自分自身になる。

## 内的自我と結びつくための＜探し求める行為＞

どう動いていいかわからず、途方に暮れて立ち上がることから始まる。青龍会のダンスワークショップにおける即興練習は、いつもゆっくりしたまるで狭いコーナーに立ち竦んでいるかのようなそろそろとしたステップで始まる。想像上の誰かに渡すために、繊細で貴重なものを抱えて、部屋を横切っていくことを思いうかべる。わたしたちはゆっくりとステージを、山を、川を、海を静かに横切っていく、ひとりまたはみんなといっしょに。そうしてわたしたちは個や集団で動く方法を発見していく。リアリティは内的な力と身体の形のつながりをとおして瞬間的に現れてくる。

あなたは木。完璧に静止した状態。木は動かない。足から床、さらにその下の地面にへと深く伸びていく根を想像する。環境が影響したときだけ木は動く。その動きのエネルギーはどこから来るのか。環境を感じとる。風は穏やかに吹き木の葉を揺らす。太陽が降り注ぎあなたを温める。あなたの葉は風に揺れ温

かい太陽に向く。取りまいて環境要素を感じとりつつ深く根づいていく。

### **グループでの<探し求める行為>**

部屋の両側に立ったふたりで始める。全てのエネルギーを感じとり、それに焦点を当てつつ中央に向かって、木に向かって少し動く。木にたどり着いたら、そばに寄り、取り囲み、立ったり屈んだりしながらあなたのエネルギーを送り、集めて戻す。5分間ほど行き、中止し、体を静止させてしばらくその姿勢を保ちみんなのエネルギーを集める。自分を見つめ、別の自己を見つめ、別の自己のなかの自分を見る。中心に向かって動き続ける。

### **地に頭を着け、エネルギーを中心に集め、終了させるための<探し求める行為>**

輪になって立ち、手を使って体のすべての四肢から、頭から腕、さらに脚、足へと、過剰な散らばったエネルギーを払っていく。軽く握ったこぶしを使って体中を繰り返し叩く。気孔を閉じる。それから輪になって正座し、手を組み、三つ数えて「えい」という声息を発し、組んだ手を腹のチャクラにあてエネルギーを中心に集める。床に頭を着けて、物理的身体へ戻す。持ち物をまとめ、自分が誰であることを認識する新しい体験と共に、社会に認められ受け入れられる形として戻っていく。

ソマティックな<場>は、新しい身体と内的自我をつなぐ体験を与え、その後日常へと送り返すことで、青龍会のメンバーや参加者が違った角度から自分たちを認識するのを助ける。ワークショップは、物理的な身体との結合から始め、内的自我の焦点化、グループでの<探っていく行為>、そして最後に自分自身と再度結びつくまでの、一連の<探し求める行為>をとおして進む。参加者は自分自身についての十分な認識をもって再び日常に戻っていく。ワークショップでの<探し求める行為>は、参加者が内的イメージから動きを創り出すために用意されたものである。<探し求める行為>が技術によらず、また振付のステップにも依らない場合、参加者は自分自身のソマをとおしてイメージを探るが、それが内的な自己の体験である。体の動きをとおしての他者との対話であり、ソマティックな交流を創り出すためにグループに入ってくる他者が立ち会い人となる。物理的な<場>、ソマティックな<場>といった空間での相互交流をとおして彼らは連続的につながる。さらにソマティックな<場>では直感的に情報を交換することで、会話的にもつながっていく。彼らは社会的な<場>ではことばによる会話を続ける。

### **社会的な<場>**

ソマティックな<場>がことばを使わない、行為をとおしてのコミュニケーションだとすれば、社会的な<場>ではことばによる会話が行われる。ワークショップ前の行動と、打ち上げでの討論では、ことばと身体的な会話による流動的なつながりが創りだされる。青龍会のワークショップ以外の活動には、会話をとおしての相互交流が含まれる。

### **ワークショップ前の活動**

ワークショップ前の食料などの買い物と打ち上げの準備は日常的な雑事であるが、それ自体も関わりあ



うための青龍会の活動であることははっきりしている。わたしは4時に事務所に着く。数人のメンバーがすでに来ていて疲れて椅子に座っている。だれかがコーヒーをすすめ、そばのポットからふたつのコーヒーカップに注いでくれる。座ってくつろぎ、あらためてつながりに満足する。日本の教育システムや、どうして会うことが肯定的な結果よりも疲れを生んでしまうのかといったことを話す。

チハルは勤めている印刷会社から休みを取っている、チエも大学から早めに来ているのでしばらくしてワークショップ後の打ち上げのための買い物に出かける。いろんな野菜、鶏肉、果物それに飲み物としてペットボトルのお茶。15人分の打ち上げのための買い物の費用は2千円以下である。

15分ほどの距離の事務所に買ったものを抱えて戻り、すぐに打ち上げの準備に入る。チエとわたしは低いテーブルについて、胡麻をすりながらおしゃべりし互いの最近のできごとなどを知らせあう。チハルは少し離れた台所で野菜を切り、みんながワークショップから戻ってきたときのための大鍋料理を準備している。5時半、リョーコが古本屋の仕事から戻る。息切れしているのは、街を半分横切るほどの距離を、もっとも経済的な交通手段である自転車で移動してきたからだ。ナオコも到着し準備のピッチもあがる。わたしたちは胡麻をすり続け、あたたかい大鍋料理の味つけに使うためにペースト状になるまで練る。ナオコとチエはハーブとその自然の効能について話している。7時が近づくと、音楽のCD、CDプレイヤー、ストロボライトをまとめ、歩いて15分の舞踏ワークショップを行うパピオセンターに向かう。他の参加者は後からそこにやってくる。

パピオに着きふたつの階段を降りその日予約している練習場に至る。部屋の予約は抽選になっている。一月前に申し込みをしなければならず、その後自分の名前が選ばれるかどうかを待たなければならない。多くの場合、場所を確保するために各人それぞれが個人名で申し込み、当選の確率を上げるようにする。この日は小さな部屋を予約できていた。他のみんなも到着し始める。トシヤが彼のビデオ・カメラをセットし始め、新しい参加者がアフリカの打楽器を静かに打ち、アキコはオカリナを柔らかにふいている、他の者は床でストレッチングをしている、わたしたちはふたつのストロボライトを別々の角にセットし、誰かが音楽のCDを選んでる。楽しい夜になりそうだ。

10時半にパティオルームを去るとき、4面の白い壁と体育館などによくみられる磨かれた板が天井の蛍光灯からの光を浴びているだけの状態に戻ったのを振り返って見る。そこで海や山をひとりで、みんなで横切ったのだ。近距離にあるこの施設の、あたたかい思いでがわたしのなかを流れるなかを、事務所兼住居に、そこでのおそい打ち上げに向かう、ふたりで、またはグループで。地下2階から1階までエレベーターに乗るみんなの顔はリラックスし穏やかで内側からの光で輝いている。みんなはちょっと熱のこもった声で静かに話しながら、三々五々夏の涼しい夜のなかを歩いていく。

ワークショップ体験と一体となっているのは、みんなでワークショップでの感情や体験それに日常生活や個人的なできごとを共有しあう、ワークショップ後の打ち上げとそこでの対話である。

## ワークショップ後の打ち上げでの討論

ワークショップの後、事務所でもたれる打ち上げは参加者の半分以上、30人ほどが加わる。ハマダさんが今までに何度も青龍会の集まりでつくった家庭料理をつくってくれる。リビングルームの雰囲気は参加者の手で急速に変化していく。小さなテーブルを折りたたんで床に並べ、その周りに座布団を敷き、グラ

ス、皿、箸をテーブルに並べ、ワインやビールを開け互いに注ぎ始める。キッチンからの食べ物の皿を手渡ししていく。ハマダさんが料理できないときは、何人かで野菜や豆腐の大鍋料理をワークショップ前に準備しておく。乾杯の合図と共にグラスをあわせる決まりきった開始の儀式があり、初めての参加者や公演や活動が入っている者の紹介が続く。徐々にみんなは自分で食べ物などを取り始め、届かない者のためによそってやる。本道から脇道に逸れた会話が始まるが、それはそれで楽しい。

早朝までの打ち上げをとおしてワインやビール、酒が討論と同じように自由に流れる。グループは小さなものに別れては、興味を失って、また大きなグループに戻ることを繰り返す。会話の中身は、人々がなにをやっているかといった一般的な情報から、ワークショップでの体験までの幅がある。会話は、この近代社会で体験した感覚、考えることと感じるもののちがひ、アイデンティティと近代のつながりなどへと広がっていく。

午前2時頃、多くの人が帰り、残っているのはいつも参加する人だけになり、わたしの臉も重くなりうつらうつらし始める。だれかれとなく、わたしの疲れに気づいて「テーマさん、風呂に入ったら。わたしたちはもうちょっと起きてるから」と声をかけてくれる。温かい湯船にどっぷりと浸かってゆったりとし、みんなはまだ夜明けまで話しているときに、わたしは別室に退出して襖を閉め、疲れ果てて布団に倒れ込む。

頭上の高速道の音で目が覚める。すでに明るくて、枕元の携帯電話が7時を示している。狭い6畳の部屋に詰めて敷かれている隣の布団で寝ている女性を起こさないようにしながら起きる。ワークショップ、打ち上げ、泊まりにかかったのは千円。襖を静かに開ける。テーブルは端に寄せられ、男性たちはリビングルームの床の布団に並んで雑魚寝している。女性たちは他の部屋に寝ている。アパート全体が寝息を除いて静まりかえっている。唯一の早起きであるわたしは寝てる人の足の間をゆっくり歩いて、朝のコーヒーをのみにでかける。近くの、地下鉄駅そばのショッピングセンターの喫茶店にいき、席についてコーヒーを注文し、ノートブックをだして昨晚の打ち上げの討論を思い返す。

2、3時間後、自分のコーヒー代を払う時、わたしが帰る頃には起き出しているだろう他のメンバーのために淹れるコーヒー豆を買う。こういうことは特別なことではない。あたりまえのことだ。人々はワークショップや打ち上げに最小限の費用を払う他に、いつも打ち上げのための食べ物や飲み物を持ってくる。朝は何人かは仕事へ出かけ、他の誰かは駅へと向かう。自由な者は近所の美術館でやっている美術展へ行くことを決める。誰かが「近くの安くてでもすごくうまいうどんを食べよう、それから美術展、そうしてコーヒー」と言う。その土曜日は時間があつたのでわたしは午後のお出かけに参加する。4時か5時頃、みんなは別れていく。これが青龍会の1日である。

ワークショップ前とワークショップ後の活動はことばを用いた相互交流であり、メンバーや参加者は自分たち自身について語りあい個人的な体験も共有するが、そのなかにはワークショップのソマティック体験やお互いの関係、実社会との関係なども含まれている。会話をとおして、各自の人生の物語やワークショップ体験を共有し、他の人の話を聞き、彼らにとって体験の意味とはなんだったのかという共通の理解を形づくる。これが、他者との相互交流で感情や思考が現れる、生成する<場>となる。

## 生成する〈場〉

場は、参加者が個的に内省し、また互いの感覚や思考を共有することができる体験空間である。参加者の感覚と思考が生みだされることを認めあう相互交流の場である。

青龍会という場について参加者が言う、「話のできる場」とか「人間の孤独を体験する場」といった感想は逆説めいて聞こえるが、生成する場ではこういった体験は対立しない。参加者が人間の孤独を体験したというとき、それは穏やかな絶望を表してもいるだろうが、しかし孤独とは、個人的な内省のなかでそういった瞬間を体験するという事を含んでいる。それは共同体のなかにある自己を認識、体験する過程の一部でもある。場は全体論的な空間であり、集団の交流が生みだし、集団の間や周辺に存在するようになるあるエネルギーの中心である。それが集団の直覚を生みだし、合理的でないコミュニケーションにも移っていきける。

相互交流のなかでまたその周辺で形づくられる集団は、親密でスポンテニアスであり、平等であり、同一的であり、整合的でなく、そこでは深い人間性を体験できる。相互交流をとおして認識を創りだすことが重要なのは、関係を創りだす標準的な方法として、交流を体系化できるからである。こういった相互交流的つながりのなかで他者を認識する方法は、社会のなかにも持ち込める。

( 翻訳・安部文範 )

## 参考文献

- Abe, M., & Hogg, M. (1990). Kitaro Nishida: An inquiry in the good. New Haven, CT: Yale University Press.
- Bachnik, J. (1994). Indexing self and society in Japanese family organization. In J. Bachnik & C. Quinn (Eds.), *Situated meaning: Inside and outside in Japanese self, society, and language* (pp.143-166). Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Carter, R. (1997). *The nothingness beyond god*. St. Paul, MN: Paragon House.
- Fraleigh, S. (1999). *Dancing into darkness: Butoh, zen and Japan*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh Press.
- Fraleigh, S., & Nakamura, T. (2006). *Hijikata Tatsumi and Ohno Kazuo*. London: Routledge Press.
- Kuwayama, T. (1992). The reference other orientation. In N. Rosenberger (Ed.), *Japanese sense of self* (pp.121-151). Cambridge: Cambridge University Press.
- Long, S. (1999). *Lives in motion: Composing circles of self and community in Japan*. Ithaca, NY: Cornell University.
- Nakane, C. (1970). *Japanese society*. Berkeley: University of California Press.
- Nishitani, K. (1991). *Nishida Kitaro*. Berkeley: University of California Press.
- Nonaka, I., & Takeuchi, H. (1995). *The knowledge creating company*. New York: Oxford University Press.
- Nonaka, I., & Teece, D. (2001). *Managing industrial knowledge: Creation, transfer and utilization*. London: Sage Publications.
- von Krogh, G., Ichijo, K., & Nonaka, I. (2000). *Enabling knowledge creation*. New York: Oxford University Press.

( ナカムラ テーマ : 英語学科 教授 )